

インドネシア バリ島, カシ・サヤン保育園・幼稚園・ 小学校との交流とバリの子育て環境

加藤 房江
(こども学科 講師)

保育園・幼稚園・小学校との交流

カシ・サヤン保育園・幼稚園・小学校では、7:30から始まり、私達が最初に訪問した日は、すでに子ども達と先生方が、校庭に整列してお出迎えをしてくれた。

歓迎のセレモニーは、日本語での「キラキラ星」の歌や伝統のバリ舞踊であった。異国の地の熱烈的な歓迎ぶりと子ども達の素直さや一生懸命な様子が伝わってきた。

また、その様子を送迎の保護者も温かい眼差しで見守り、こちらからの挨拶もにこやかに答えてくれた。

カシ・サヤンの先生方とのミーティング後、子どもたちへの授業を3回に分けて行った。

1回目は5歳児クラス20名, 2回目は小学1年生(6歳)15名, そして, 3回目は4歳児合同で33名であった。

5歳児クラスでは、先生が折り紙の色を見せ「あかい」「きいろい」などの日本語を繰り返し教えていた。「あおい」に関しては「あい」のような発音になっていたので、この発音でよいかと、私にアイコンタクトで確認をしてきた。こちらから、「青い」という言葉の発音を何度か行くと、先生はホワイトボードに「aoi」記入して確認した。

そして、先生と私の2人で子ども達の前で「青い」を繰り返し発音する。なかでもオレンジ色のやや濃い色については、「だいだいろ」と発音しており、細かいところまできちんと教えているという印象を受けた。

その先生に続いて私が交替して授業を担当した。まず、簡単な自己紹介を行った後、ペープサートを使いながら、「アカイふうせん・・・ルルル・・・」などと歌をうたいながら色について紹介をした。このペープサートは、いろいろな

色の「ふうせん」が、小動物やたべもの、そしてキャラクターなどに変身するものである。変身の時に「うちわ」の持ち手の部分の棒をくるくる回転させ、何に変化するか当てるところに面白さがある。

子どもたちはその回転させるうちわの裏に描いてある絵を瞬時に認識して「リンゴ？」などと大きな声で答えてくる。先ほど色について、学習した後なので、一つひとつ「ふうせん」を出すごとに日本語で「○○」と色を確認し歌いながら色を覚えるという、楽しい時間となった。

つぎに「わらべうた」の「なか・なか・ホイ」を行った。これは、もともとは「まりつきうた」であるが、「なか」と「そと」のことばの繰り返しと並び順の面白さを活かして、しぐさ遊びや運動あそびに発展させながら、いろいろと繰り返し遊べる楽しさがある。

はじめに「手」のみの動きをゆっくりくりかえし行う。次に座ったまま「足」で同じ動きを繰り返し楽しむ。



最後は、立ってジャンプをしながら、「足」を揃えたり、開いたり動きで「なか」と「そと」を表現する。初めての子どもたちもこの段階までになると歌や動きを覚えて軽快な動きになってくる。しかし、かなりの運動量なので、担当の先生は笑いながらも息が上がっていたが、子ども達は「やったぞ」という達成感に満ちた様子が伺えた。



最後は、アニメーション・キャラクターの「ドラえもん」と「ピカチュウ」を表裏に描いてある大型メンコを使って、大型のオセロゲームをした。2チームに分かれて、どちらのグループが自分のチームに割り当てられたキャラクターのメンコをより多く表にすることができるかの競争である。

保育現場で仕事をしているときに、雨の日の運動不足解消にはもってこいの遊びであり、年齢により時間を調節したり、キャラクター以外にも色でチームを分けて行う楽しみ方もある。今回のクラスは人数が多かったので、4つのチームに編成をした。いちごチーム、りんごチーム、パイナップルチーム、すいかチームに分かれており、これを2グループに分けて対戦ゲームを行った。「ドラえもん」と「ピカチュウ」のどちらかの自分のチームの面を競って裏返す子ども達の一所懸命さに感動すら覚えるほどであった。



最後にご褒美に、本学の名（Junshin）の入った鉛筆を子ども達一人ひとりに手渡すと「ありがとう」とキラキラした瞳を輝かせて、日本語で返してくれた。

次に小学1年生（6歳）のクラスに案内されると、さきほど歓迎のバリ舞踊を披露してくれた女の子がおり、笑顔で出迎えてくれた。授業は同じものであったが、一歳年上なので、ふうせんの色や変化した小動物やたべもの、キャラクターの名前を日本語ではっきりと発音していた。私も覚えたインドネシア語で「さかな」を「ikan・さかな」と発音すると子どもたちも続いて笑顔で繰り返し発音していた。

また、日本のキャラクターについてどんなものに人気があるのかの尋ねてみると、やはり「ドラえもん」「ポケモン」それに「コナン」「ハローキティ」などの名前があがった。15名の子どもたちであったが、自分のチームの「ドラえもん」と「ピカチュウ」を競ってめくる姿は力強く元気であった。

4歳児合同クラスでは、教室の中央を広く使ってゲームができるように、両側に机と椅子とを寄せて、子どもたちが座って見学できるように、先生方が準備して待ってくださった。ふうせんのペープサートでは、変身するときには園児の傍まで行き、ゆっくり回転させたり、早く回転させたりして変化をつけた。笑顔で「わぁー」とみんなの驚いたような声が聞かれ、楽しむ姿に私自身がやりがいを感じるほどであった。

「わらべうた」では、前の時間の授業に参加していた先生もおり、動きもスムーズで子ども達にも動きのアドバイスをしてくれた。

そして、最後の「ドラえもん」と「ピカチュウ」を使って、大型のオセロゲームでは、バリの先生の真似をして、ゲームの最初に「がんばって」という掛け声をかけると大きな声で「がんばって〜」と子ども達の大きな声が一斉に返ってきた。人数が多いクラスなので二つに分けてゲームを行った。先生方もスムーズに補助にまわってくださり、とても授業がしやすかった。

えんぴつのプレゼントの後は、子供たち全員の「ありがとうございます」のことばと、チューリップの歌で私たちを楽しませてくれるという先生や子どもたちの優しさを感じながら教室を後にした。

どのクラスも素直で明るい子ども達であった。カシ・サヤンの先生方の明るく熱心な教育への取り組みとバリの保護者の先生に対する信頼と尊敬の気持ちが、このような素直で良い子に成長させるのではないかと感じた。これは現代の日本が忘れ去り、これからでも学ばなければならないことだと深く感じた。

また、今回は、視覚的に分かり易いペープサートやキャラクターの大型のオセロゲームを使ったので、あまりインドネシア語が通じなくても子ども達と一緒に楽しむことができた。このように言葉や服装が異なっても、楽しいことは万国共通であるということを実感した。

バリの子育て環境

カシ・サヤン保育園・幼稚園・小学校のマネージャーであるトレスナさんのお宅に訪問させていただいた。南国のバリ島は暑いと思われる人も多いだろう。私自身もバリ島は蒸し暑くてたいへんな所かと思っていた。しかし、トレスナさんのお宅は日本で言うならば、高原のような爽やかさに囲まれていた。

このトレスナさんのご長男夫妻に、産まれて一か月に満たない女兒のキナンティーちゃんがあり、子育ての様子を聞くことができた。

生まれて間もないこともあるが、抱っこしてみると軽くてなんだかスッキリしている。

特にお尻まわりのスッキリ感を強く感じたので、母親に尋ねてみると「おむつ」をしていないとのことであった。それでは、この生理的現象をどのようにお世話しているのか確認させていただいた。赤ちゃんはおむつをせず、そのままネル素材のズボンをはいており、同じくネル素材の布をその下に敷いてカバーしている。汚れたらお洗濯をするが、バリの暖かい気候により洗濯物も良く乾くようである。

また、私達が宿泊したホテルに勤務していた群馬県出身の日本人の女性が、いろいろとお話してくださった。

バリに観光した時に現地のガイドさんと知り合い、ご結婚されたとのことである。現在は小学生の息子さんが2人おり、インドネシア語、英語などで話し、日本語も少し会話しているとのことである。やはり、多言語のお国柄の強みで、素晴らしさと羨ましさを感じた。

さて、おむつのことが気になり、質問してみると、自身の子育ては実家の群馬で縫ってもらった布おむつを送ってもらったので、それを使用していたそう



だが、バリの方は、おむつは使用せず、自然にまかせていて、抱っこしているお母さんも、時々前が濡れてしまっているのを見かけたとのことであった。そのためか比較のおむつがとれるのが早く、1歳半～2歳くらいには、パンツで過ごせるようになるということである。

日本では、3歳児で保育所や幼稚園に入園してきても、クラスに2～3人位は、紙パンツをしている状況を見かける。お母さんも園で、トイレトレーニング(排泄訓練)をしてもらいたいと考えている現状がある。排泄は、失敗した時の不快感やおむつを交換した後のさっぱりとした爽快感を肌で感じる事が大切である。バリの自然体での子育ては、暖かい気候と相まって、子どものためには良い育児法なのかもしれない。日本の育児に置き換えてみると、寒い冬もあるので、なかなか自然体では、難しいところもあるが、布おむつは濡れた時の不快感により、早くおむつがとれるようである。

私自身も、3人の子どもの子育ては布おむつで、夜とお出かけは紙おむつを使用していた。おむつを外す時期は2歳のお誕生日までには外せたらと思い、まめにおむつ交換をしてきたことを思い出した。改めて布おむつの良さを感じたのと日本の優秀な紙おむつ・紙パンツが育児を助けていると感じた。

私たちがトレスナさんのお宅にお邪魔している間、ご家族のほかご近所の方や親戚の方が訪れた。私達にこやかに挨拶し、親しみを込めて接して下さった。そして、やはり場の中心は生まれたばかりのキ

ナンティーちゃんであり、大勢の中で手から手へ抱っこされてあやされていた。バリの家族は、子ども達が結婚してもご両親と同居するのが一般的で、仕事で若いときに町に出て働いていても、必ず老後は家に戻ってくるという。その根底には、ヒンドゥー教の教えがあり、やさしい気持ちを教え、ハートを大切にしているとのことである。トレスナさんも自身のお子さんの他に親戚やご近所のお子さん、また、他人でも学校に行けない子どもと一緒に住んで世話をし、学校に通わせている。

特に親戚との絆も強く、力（教養や経済力）のあるものが、そうでない者の面倒をみていくのが当たり前に行われ、年若いでもその家族だけでなく、親戚で面倒をみるとのことである。このような家庭において育まれる愛情を受け、バリの子ども達は素直でやさしく、人に対して、尊敬の気持ちを持つことを学んでいくのだ。

かつての日本のコミュニティにおいても、このような交流が行われており、絆を大切にし、人々への思いやりや強い結びつきが感じられた。しかし、現代の日本では次第に忘れられ、失われつつある。日本の現代社会の問題である核家族化に伴う育児不安や孤独な育児などが原因の1つであると言われている虐待の増加も、バリにある絆が日本には失われてきている結果であると考えられる。

人と人との結びつき、やさしさや心の触れ合いがいかに大切かを遠い異郷の地、バリ島で触れることができた有意義な研修旅行であった。

